

科目「学習指導と学校図書館」での授業・活動を振り返る —ささやかなクロニクル—

家 城 清 美

はじめに

2009年度から同志社大学で教鞭をとるようになった。それも最終コースを回った。離職に際して、同志社大学でお世話になったこの10余年を振り返り、筆者の授業報告をする。同志社女子中学校・高等学校の学校図書館で35年間勤務した。在職中から退職後の今日まで、同志社大学をはじめ、他に5、6校の大学でも司書教諭養成科目の内、主に「学習指導と学校図書館」を担当した。いずれの大学の学生からも言われ続けたことがある。それは学生の抱く司書教諭像と学校図書館像についてで、授業を受ける前は、「司書教諭と司書の区別がつかない。」「常に図書館に居て、本の貸出し・返却など、受動的に仕事をしている感じ。」「本の管理をしている人。」。授業を受けた後は「学校図書館がこんなに授業で使えるとは思わなかった。」「司書教諭が何をしている人か分からなかったが、この授業を通して多様な教育的支援をおこなっていることが分かった。児童・生徒にとどまらず、教員に対しても能動的に関わっていることが分かった。」というものである。さらに、「司書教諭の仕事がこれだけあると言うことが分かったので、やり甲斐がある。」との意見もあった。毎年、同じような感想を目にして、「今年も……。」と思うこともあったが、学生のこの理解は、学校図書館に長く携わり、理論と筆者の体験などを取り入れた実践的な内容を含むもので構成された授業により得られたものであると思うようになった。このことが今回の投稿の主な理由である。ただし、このことを述べる前に、2020年度からは、例年とは異なる授業形式や授業方法を遂行しなければならなかった。まず、2020年度と2021年度のコロナ禍での授業の経緯などを、他の大学の状況も交え報告する。

1. 司書教諭養成・資格付与科目「学習指導と学校図書館」

1. 1. 遠隔授業—2020年度、2021年度

授業は、春季の2校は遠隔授業、秋季の3校は対面授業でおこなった。授業内容についてはこれまでと変わらない内容で進行できたので、2. 同志社大学での科目「学習指導と学校図書館」で記す。

2020年は早春の頃から新型コロナウイルスに振り回される事態となった。筆者は春季授業（2大学とも8月、9月の集中授業）をA校、B校、二つの大学で受け持った。A校からは新年度早々、遠隔授業をおこなうことを伝えられていた。B校は、始めは、対面授業を予定していた。しかし、授業実施日が近づくにつれて、大学周辺でも感染者が増加し、学生から通学の不安を訴える声上がり、急遽、遠隔授業に切り替えることになった。

複数の大学で10余年授業をおこなっていたが、対面授業のみで、遠隔授業をおこなうこと、資料提出などにそれぞれの大学の Learning Management System (以後 LMS) を使用することも初めてのことであった。春季の授業を担当したA校からは、基本として Teams を使用することが伝えられた。B校では、Teams の使用は専任教員のみであった。非常勤講師は授業用アプリをアプリ会社（筆者の場合は Zoom）と個人で契約し、授業終了後に立替分を大学から返金された。いずれにしても、遠隔授業用のアプリについて知る必要があり、まずは、書店で Teams と Zoom のガイドブックを複数冊買い込んだ。念頭にあったのは、対面授業のように、授業の後半部でグループ演習をすることであった。まず、Zoom を使用するB校では、Zoom のブレイクアウト機能を利用することで、小グループごとに課題に関するテーマ決定や作品を完成させるための学生間の話し合いの場と教師と学生間の質疑応答の場を持つことが可能になった。その後、A校で、Teams での授業が開始される予定だったので、Teams を筆者のパソコンにダウンロードした。Teams を立ち上げようとすると、動作が遅く、画面が起動しなくなった。2020年度の集中講義は、大学の手配で、Zoom に変更し授業をおこなった。Teams については、後に授業を始めた大学の説明で、Teams を利用するのに必要な手続きをとると、大学の Web 上のアプリで、Teams を利用できることがわかった。

学校図書館に在職しているときは、機械操作に熟達している同僚に気軽に尋ねることができたが、今は相談できる相手が近くにいないことと、筆者のパソコンが、2013年製で、どれくらいの動作環境に耐えられるかが分からず、絶えず不安がつきまとった。集中講義の場合は短期間で授業を終えるので、トラブルは授業の進行にとっては大きな妨げとなる。筆者が所有する2台の内、少し動作の遅い方をサブとして起動させておいて、いざという時には切り替えられるようにした。遠隔授業で主に使用したパソコンは、製

造年は他の1台より古かったが、動作はスムーズでマイクを付ける必要もなかった。しかし、サブとして使用したパソコンは、マイクを付けないと音声クリアにならなかった。製造年にかかわらず、メーカーや機種によって音声などの設定が異なることが次第に分かってきた。

Teams、Zoom 双方のガイドブックを数冊ずつ購入したが、実際に使ってみると、記載されていないトラブルに見舞われることが多くあった。授業開始直前まで、Webサイトで同じようなトラブルを検索し、対処方法を学んでいくというスリリングな日々であった。

それぞれの大学は、PDF化した操作マニュアルや動画でLMS操作の支援をしていた。授業の進め方の案内は、LMSを開発した企業のスタッフや大学の教員によるWebセミナーでおこなわれた。遠隔授業に必要な学生のメールアドレスの対応では、人数によらず講師に送信して、Teamsを起動すると、チーム管理ができるよう準備済みの大学と、教員がおこなう作業とされ、「@以下は__.ac.jpですから、学籍番号から先生が作成して下さい。」とする大学や、履修生数が規定の人数以下なら教員が作成しなければならない大学があった。「学籍番号をダウンロードし、一挙にメールアドレスは作成できる。」との説明があったが、ダウンロードの際の拡張子を指定の形式にしても何か異なるのか、一人ずつメールアドレスを作成しなければならず、それをチェックするという作業にも時間を費やすこともあった。

2020年、予防に関する情報が少ない頃、無症状でも感染させ、時には死に至らしめる厄介な新型コロナウイルスは恐怖であった。ある大学のWeb上での情報交換の場では、「非常勤の場合、通勤途中での感染は、保障はされるのか。」の旨が書き込まれることもあった。これは、投稿者だけの不安ではなく、対面授業の場合、通勤時に感染しないか筆者も大変不安に感じた。遠隔授業の準備に関しては、授業用のディスク、マイク付きイヤフォン、容量の大きい外付けのハードディスク（授業の録画や学生の提出物の保存のため）、パソコンの予備のバッテリーを購入した。大学のマニュアルや遠隔授業の方針を示した書類などは、パソコン画面では見にくいのでをプリントアウトすることにした。そのためのインクとコピー用紙をいつもより多く用意しなければならなかった。

授業で大きく変えたのは、各回で話す内容の順番の入れ替えであった。授業を実施する前に、参加したWebセミナーでの経験で、長く集中力を維持するのは難しいと感じた。対面授業では、様々な説明の後に結論を話していた。遠隔授業では、先ず結論を述べ、それから説明するように試みた。

1. 2. 遠隔授業での課題—2020年度、2021年度

2020年度、授業は幸いなことに滞りなく進められた。他大学ではあるが、機械に不慣

れな教員は、「画面に顔を出さず、授業内容を読み上げ、その後膨大な課題が課せられた。」などを学生から聞いた。授業に卓越していても、機械操作が不慣れなだけで、思うような授業ができない事態が生じていた。

Teams で使用する学生のアドレスについては、既定の履修生数以下でも、複数の授業を担当し、合算すると規定数以上の学生に授業をしている場合もあるので、履修生数で、学生のアドレスを事前に Teams と関連付ける支援の有無が決まることには疑問がある。Teams・Zoom に必要な学生のメールアドレスは、授業ごとに準備し、授業でアプリを使用する旨を申請されたら、不慣れな教員がアプリに煩わされることなく授業に利用できるような配慮を願う。2016年、中島幸子元同志社大学嘱託講師が司書教諭講習に関する遠隔授業の体制に触れ、学習効果が得られるような組織的な支援体制を導入した場合、対面学習と同等以上の学習・教育効果が上がっていることに言及している⁽¹⁾。このことから、遠隔授業の場合は、教員が授業をどのような状況でも遂行できるように、準備段階から遠隔授業の支援スタッフが必要である。

非常勤講師が、学内からの遠隔授業が難しく、自宅から授業する場合、対面授業では常設の機器を利用できるのと同じように、非常用としての機器の貸し出しなどの配慮が必要と感じた。

非常勤講師に支給されるのは、授業数から換算された給与と交通費（遠隔授業ではなし）である。遠隔授業のための文具雑品費への配慮も必要ではないだろうか。通常に物事が進められないことに直面し、混乱、不安と負担が付きまとう2020年度であった。

2021年度、遠隔授業は春季集中授業のB校の1校のみで、他は対面授業となった。B校で非常勤講師にも学内メールアドレスが付与され、Teams が利用できるようになった。この大学は、LMS に大学の教員が責任者として関わり、メールなどでの質問に応じていた。質問内容によっては、責任者が操作を試行し動作確認をおこなう支援もあった。教員であるので希望する授業方法でのLMSの活用方法の対応は的確で、大いに助けられた。Teams でも、[クラス教材のアップロード] をクリックすると、教員はファイルをアップロード、ファイルの編集することが可能であるが、学生は閲覧することしかできない「クラスの資料」という名前のフォルダーが事前に作成されていた。

Zoom に比べて Teams は容量が大きく、動作が重かった。パソコンの仕様やメモリなどに因るのかも分からないが、筆者のパソコンの場合、授業で共有する画面を Zoom では複数アップしても支障はなかったが、Teams では、1つしかアップできなかった。複数アップしておき、共有する画面を順次見せようとする、学生から画面は変っていないと伝えられた。最後にアップした画面しか見えていなかった。Zoom では授業は落ちなかったが、Teams は何回か落ちてしまった。

B校の学生に、試験はどのように提出しているか尋ねたところ、Teams の「投稿」

に提出しているとのことであった。この大学では LMS に試験の提出箇所はあるが、対面授業で実施されるような、筆記形式のものを提出できるものではなく、書式が決められたものしか提出できない仕様であったので、課題など他の箇所では提出しなければならない。対面授業で実施するような筆記形式の試験を LMS でも実施できることを希望する教員もいるのではないかと思う。システムに柔軟性があれば、授業途中で対面授業から遠隔授業に変更になったとしても、試験実施には支障なく対応できるのではないだろうか。他校の LMS でも「提出物」については様々な形式の物が提出できるようであるが、「試験・テスト」については、簡単に実施できるよう、一考の余地があるように思った。大規模校で、同時に遠隔授業を実施するには、様々な負担があると推察できるが、一つの授業の中で、内容が講義的なものやグループ演習などで構成されている場合、オンディマンド授業や同時配信での授業を組み合わせることができれば、負荷は軽減されるのではないか。また、対面授業もハイフレックス型授業を導入すれば、不測の事態への準備になるのではないだろうかと思った。2年目の遠隔授業では、様々な課題が見えてきた。

1. 3. 対面授業での課題—2020年度、2021年度

対面授業でも、グループ演習での「密」を避けるために、Teams を利用したが、大学の対応はまちまちであった。2021年度、A校では、Teams にフォルダー「クラスの資料」がなかったため、作成を試みた。「クラスの資料」の作成には SharePoint を利用しなければならないようであり、専任教員のみ利用可能の設定になっていた。Teams の「投稿」にアップしたファイルでも編集不可などの設定ができる大学もあった。他の方法で、投稿したファイルの管理方法を設定できるのかもしれないが、筆者は昨年度からの利用者で、未熟であることを自認しながら Teams を利用していた。出講したそれぞれの大学では、マニュアルは図が挿入されるなど、昨年度より分かりやすいものになっていた。それでも、記載されていないような、個別の支障に関しては、関係部署に赴けば、対策の教示を得られる大学もあった。一方で、関係部署に相談しても、関連するマニュアルの箇所のリンクなどを送ってくるだけのところもあった。メールでやり取りしていた質問に対して、直接出向いて教示を得ようとしたが、メールで対応した当人ではない人物とのやり取りで、思うような策は得られず、途中で切り上げて帰途に着くこともあった。

対面授業で Teams を利用したい旨を伝えても、「なぜ、対面授業で Teams が必要か。」が理解されない場合もあった。Teams・Zoom＝遠隔授業なのである。2020年度、対面授業の中で、「課題や参考資料の提示などは、遠隔授業に使用されている Teams か LMS のどちらかに統一してほしい。」との学生の声に応え、提出について詳細に管理ができる LMS を使用することに決めた。

各大学のLMSはそれぞれ使いにくさがあった。容量が大きいデータは送れない場合が多かった。PowerPointでアニメーションを使った場合、学生への配付資料はPDFかHTML形式で提示され、アニメーション始動前の画面が保存されてしまい、アニメーション始動後の学生に知らせたい画面を提示できないこともあった。アンケートの項目があっても、多肢からの択一ができない。あるいは、多肢択一ができて集計方法が規定され、思うように集計できないものもあった。LMSで使用される用語が統一されず、同じような処理をするにしても、LMSごとに用語が異なり戸惑うことも多かった。いずれの大学でも、すべての授業で各大学のLMSが使用されているとは思えない。今後、大規模な遠隔授業の実施を想定するならば、機械操作に慣れない教員でも、簡便に資料提示や課題作成ができるように、また学生の提出物を簡便に管理できることが望まれる。学生側からすれば、容量の大きい授業の資料を受け取りやすくすることが望まれる。LMS間の用語の統一や課題を提出しやすい柔軟性のあるLMSになるよう、改良を考慮する余地がある。

2020年度は、システムの機能の制約を考慮しながら、どうすればファイルが送れるか工夫する学生も存在した。2021年度は、TeamsやLMSに慣れてきた学生も多いようだった。しかし、LMSでの提出物を2020年度と同じような形式にすると、「××先生のような形式にしてほしい。」との要望があった。これには「昨年の学生ができるのに、なぜ今年の学生はできないのか。このようなやり方で、提出形式が決定されていて良いのか。」と戸惑った。今後の不測の事態を考えると、大学が学部ごとの提出物の形態に合わせた公的な提出形式を提示し、学生にLMSの利用方法を周知し、利用を促進することが肝要ではないのかと思った。対面授業においても、LMSや会議用アプリを利用することが多くなり、それらから生じる支障の対応に追われる2年間であった。

2. 同志社大学での科目「学習指導と学校図書館」

2000年度、某国立教育大学で「学習指導と学校図書館」を担当したことが講師の始まりである。学校図書館法が改正され、クラス数が12以上の学校では、司書教諭の配置を義務づける過渡期であった。履修生数は200名を優に超えていた。常時出席する学生が約170名。大講義室でおこなった授業は、一方向の教授型でしかおこなえなかった。学生に示せたのは、ブックトークやストーリーテリングの実演であった。野坂昭如の『戦争童話集』の中の作品でのストーリーテリングで、講義室の空気が一瞬止まったと感じたことがあった。学生はストーリーテリングという手法を新鮮に感じたのだろう。成績評価は、当時高校生で、和歌山県で起こったカレー殺人事件に取り組んだ三好万季の『四人はなぜ死んだのか』を読み、彼女の情報活用のプロセスに留意して、問題解決のプロ

セスを考察するレポートと期末試験（筆記）でおこなった。「学校図書館を使った授業の講義であるのにこのような内容でよいのか。」と自問した。この反省から、授業では、後半に必ず、グループ演習を組み込むようになった。図書館学は実学でもある。習得した理論は、実践に活かされなければならない。司書教諭は一人職場が多く、相談できる同僚を校内で持ちにくい。そのような状況下で、即戦力・実践力が要求される。

授業は三部構成とし、一部にあたる第1回から第5回の授業では、日本の戦後教育改革史、各時代の学習指導要領などから当時の学力観を知る。日本の学校図書館史、海外の学校図書館史と利用指導理論を学ぶことを主としていた。

二部の第6回から第10回の授業では、実際に学校図書館でおこなわれている授業や課外活動への支援と方法を紹介した。現学習指導要領では、全教科でのアクティブラーニングの導入が提唱されている。そこで、資料の提供やパスファインダーなど従来からの支援方法に加え、グラフィックオーガナイザーの作成など、児童・生徒の思考の可視化や思考過程を支援する方法に重点を置くようになった。ブックトークや学習の成果としての発表方法などは動画などで示す。

三部の第11回から第15回の授業では、今までの歴史的経過、理論、支援方法を理解したものとして、学生を5～6名の小グループに分け課題を課す。多くの学生が図書館を活用した授業を経験していない。児童・生徒として、図書館を使った学習を経験したうえで、学習の支援活動の時期や内容を考えることが必要と考えた。課題に関しては、トピック学習として、関連映像を視聴し、課題に関してイメージできるようにした。発表に関しては、学生同士で発表を評価するルーブリックを取り入れた。成績評価はグループで作成した作品3～4点の評価、発表時の教員と学生のルーブリックに基づく評価と期末試験の結果でおこなう。2020年度、2021年度は期末試験を、授業内の小テストとレポートに変更した。

同志社大学での二つの授業の内、4時限目の授業では、この三部の1回の授業を学校図書館の見学にした。6時限目の授業を履修する学生は見学に参加できないので、代わりに司書教諭在職中は、学生を職場に招き、学校図書館の資料や情報機器を使いながら課題に取り組む時間を設けた。司書教諭を退いてからは、大学の図書館を利用した。

課題は、何年かで変更した。最初の課題は、指定された外国の家庭料理のレシピを様々なメディアで調べ、それから主食を割り出し、食文化からその国を理解するものであった。次はスティーブ・ジョブズが情報社会に与えた影響。大学の所在地を自宅の場所として、所在する防災の避難場所を含めた自宅周辺の町の紹介。その次は、京都への修学旅行の1日自由行動計画の立案で、京野菜に関係する年中行事や寺社を取り入れた見学・体験を含む計画を立案するものであった。既に履修していた学生から伝わっていたのか、課題発表時に「野菜でしょ。」と言われることもあった。これらは、正解が一つでない

学習活動の支援に関する課題であった。

最近では、教科で量的（点数）評価をされるような場合でも、学校図書館は十分に機能することの理解が進むような課題を考えた。大学入学試験に記述式が導入される予定で、科目について幅広い知識を得ていなければ解答できなくなる。現学習指導要領の歴史的分野で、「ある時代の生活と自分たちの生活との関係を知り、歴史をただの暗記とするのではなく、身近に感じるものとしてから歴史的事柄を考察する。」旨を歴史の学びとしている⁽²⁾。教育委員会が、教科ごとに大学入学共通テストの予想問題を発表していた。これを参考に、第二次大戦後の外交問題に関しての課題を学生に課した⁽³⁾。2017年度からは、今日の生活にも根づいている室町文化について考えるものである⁽⁴⁾。

三部に入ると授業中は小グループに分かれ、発表に備えての討議と作品を作成する。生徒として課題の発表内容を模造紙にまとめる。発表では、前半は生徒として模造紙を示しながら、課題について説明する。後半は、課題を発表するまでの情報活用のプロセスを振り返り、困難であったプロセスを確認する。そして、体感した困難は児童・生徒にとっても困難であることを理解し、二部で紹介された方法などから考えた支援時期や内容を司書教諭の支援として紹介する。さらにこの授業の履修前後の学校図書館観や司書教諭観、教授型授業と学校図書館を活用した授業での学びの違いを述べる。

2018年度から学校司書を目指す学生も「学習指導と学校図書館」を履修しているの、司書教諭観に代えて学校図書館スタッフ観に改めている。新型コロナウイルスの前までは、授業時間外でも、グループごとに話し合いと作品の作成がおこなわれた。2020年度、2021年度は、密を避けるため、グループでの作業は授業2回分PC教室でTeamsを使い作業をおこなった。授業時間外の作業でも、学生が密にならないよう、グループごとに選択した連絡方法を通して遠隔で作業をおこなうことにした。また、対面授業が遠隔授業に切り替わる可能性も考慮して、提出物はすべてデジタル化し、いずれの授業形態になっても、提出物は内容や種類は変えず、学生に負担にならないようにした。ルーブリックは対面授業用より項目を減らし簡便にした。配付資料についても、「遠隔授業中、送られてきた大量の資料のコピーに料金も相当かかったので、資料は印刷したものを直接配付してほしい。」との学生の要望があり、2020年度は2回目の授業で、2021年度は1回目の授業で使用する全ての資料を配付した。

2. 1. 学生の課題への取り組み態度の変化

2020年度から遠隔授業をおこなったB校は、初めて授業を担当したのとは異なる教育大学である。授業構成は同志社大学でおこなっているものに近いもので、対面授業と同様に進めた。人数は1クラス50名前後であった。履修希望の学生は多く、2クラスに分けて授業をおこなった。学生は課題にスムーズに取り組んだ。彼らは学校図書館を活用

することで、様々な分野の資料を提示することができ、児童・生徒が教員の発問に答えられることをよく理解した。教師を目指す動機と教育実習の経験が大いに影響していると考えられ、児童・生徒が学校図書館を使う様子を想定し学校図書館を使った授業の支援方法を発表した。教育大学の学生は、この20年間で変化した学力観や現在望まれている授業方法の理解が根づいていることを実感した。

課題解決のための情報収集については、他大学でも学生の課題への取り組み方は変化してきた。10年も前になる頃、課題を課すと、図書館で借りてきた資料やプリントアウトしてきた資料を持ち寄って討議を始めた。スマートフォンが普及した頃から持ち寄られる資料は少なくなり、各自スマートフォンをスクロールする姿を見ることが多くなった。締め切り日が近づいても慌てなくなった。常に調べられると思っているからだろう。しかし、この頃から、発表内容が、自分たちの興味・関心に引きつけられておらず、評論的な第三者の発表のようなものや考察が足りない発表が垣間見えるようになってきた。

「だから、貴方たちの考えは。」と問いかけたくなることも増えてきた。以前は、発表時に「調べれば調べるほど、(印刷)資料を読まなければならなくなった。」などと述べた。現在は「どの情報が正しいのか分からないので、情報リテラシーを育む必要がある。」などと述べる。調べるメディアが非印刷資料へシフトし、多様な資料や複数の資料を読んで課題を深く掘り下げることへの希薄さを感じるようになってきた。

3. 科目「学習指導と学校図書館」で伝えておきたいこと

3. 1. 資料提供の適切な時期

元勤務校は図書館を活用する授業が、高校3年生を中心に多くあった。加えて、司書(学校図書館事務職員)から司書教諭に職種変更となった1年後の2002年度から、勤務校で「総合的な学習の時間」が始まり、その後10年間全学年で取り組まれた。年間授業はすべてあるいは一部が図書館を利用する授業として時間割に組み込まれ、多くの教員が、長期間、頻繁に図書館を学習の場とした。担当教員との綿密な打ち合わせをおこなうよう心掛けた。教科を支援するガイダンス資料の作成に関しても、担当教員と打ち合わせをする機会を得るようにした。身近に授業する教員を見て、授業の進め方を吸収・分析した。この経験がなければ、「学習指導と学校図書館」でのグループ演習の課題は成立しえなかった。この間、人文科学系教科と自然科学系教科の教員との協働を通じて、資料の提供方法が異なることを学んだ。

授業では「まとめ」で触れるが、教科の支援をおこなう際にとっても重要なことであるので、この紙面でも記しておきたい。以下のことは、理科の教員から告げられたことである。自然科学系の教科は、実験・観察・考察を第一義とする。教科教員は、生徒に目

の前の事象をよく観察・実験し、結果を考察するように指示する。観察・実験したことが、資料などに書かれていることと異なったとしても、何故違ったか考察することが大事である。生徒は結果が他の生徒と異なったとき、資料から結果を書き写してしまう傾向がある。例えば、生徒が、イネを育て、観察記録をとる場合、途中でイネが枯れて記録が取れなくなったとき、提出のために図書館の図鑑などから書き写す。しかし、それは教科の目的と一致しない。まず、目前の結果を観察・考察し、次に資料で結果を確認する。そして、違いは何故生じたのか考察することが大事である。資料が適切な時期に提供されなければ、教科の学習支援とはならないのである。そこで、授業の前、授業中、授業後の担当教員との打ち合わせが重要になる。観察の結果が思い通りの結果でない場合、教科教員から助言を受けた後に図書館の資料で確認・考察するように導くことが学びにつながる。このように、教科によって資料提供の在り方に配慮があるのである。資料提供を学校図書館スタッフの専門性とするならば、中等教育の様々な教科の目標・目的と授業方法を知ることが重要になる。

3. 2. 資料提供とガイダンス

課題によっては、提供する資料の内容も異なってくる。2020年度の秋季、授業は対面でおこなった。いつ状況が変わるか分からず、学生への負担を減らすべく、課題の内容を絞り、学生がテーマを決めやすいようにした。これまでは、教科単元の内容を広範囲に含むものを課題とし、学生は、テーマ決定から始めなければならなかった。今回のように、ある程度課題が絞り込まれている場合、関連するキーワード・検索語は設定しやすくなるので、多くの学生が、「多くの情報を収集しやすいが、情報がありすぎることでその情報に信ぴょう性があるのかどうか判断に困った。」と発表した。この場合は、情報の評価を中心とした支援が必要になる。事前に担当教員から生徒の調べるテーマの情報を得ておき、テーマごとに図書館が作成した推薦 Web サイト、推薦図書リストなどの支援ツールで、複数のメディアから情報を収集し、それらを比較しながら評価できるような支援が必要になる。

従来のように、情報活用のプロセスにおいて、最初のプロセスであるテーマの決定から開始するとき、多くがテーマの決定を困難とする。このような場合、最初の段階で、多角的な視点からテーマを決められるよう、パスファインダーやブックトークに加え、幅広い分野の参考資料と基礎資料の提供が必要になる。一つの学習の中で、情報活用の全プロセスに関係するように授業進行がなされることが理想である。しかし、教科の単元を支援する場合、いずれかのプロセスに特化した支援をすることもある。資料提供やガイダンスは状況に応じて臨機応変に遂行しなければならない。

情報活用の指導で、現在は情報の信ぴょう性に注意が向けられているが、アメリカの

学校図書館基準である『STANDARDS FOR 21ST-CENTURY LEARNER IN ACTION』⁽⁵⁾では、中学生になると「情報には文化的・社会的文脈があることを理解する。」ことが求められている。誰が、何のために、誰に向かって発信しているかなどの観点から、自分の発表に適切な資料であるか判断すること加えて、情報の背景にある文化や習慣における価値観の違いについても、理解し、認めることが重要であるとしている。情報を理解するための多様性とそれによって得た理解を共有することの指導も、司書教諭の指導範囲になる。

司書教諭として情報科教員と話したとき、「行事などによって授業数が減った場合、情報活用のことまでは教えることができないが、図書館のガイダンスで生徒は学んでいたのだから、情報検索などの情報活用については、軽く触れるだけで授業を進めることができた。」と言われたことがある。情報検索の際の演算式と Web 上の検索エンジンの詳細検索・オプション検索のガイダンスをしたのである。数学の集合の単元などで、図書館での資料検索を兼ねて、生徒が集合を学べば、数学の内容知と資料検索の方法知を学ぶことができるのではないかと思う。教科書のコラム欄に情報活用が掲載されているが、現実には、「それを授業中に触れられるほどゆとりがない。」と教員は言う。情報活用に関する事柄については、司書教諭が授業と連携して教えていけることが多いと考える。

3. 3. 授業での協働

同志社の学内のすべての中学校・高等学校には、専門・専従の司書教諭が存在する。その中で、情報交換や研究を目的とした研究会を催してきた。2011年に文部科学省が募集した事業「学校図書館の有効的な活用」に、2012年研究会で応募することにした。その報告書の中に情報科教員と司書教諭の協働に関する実践報告がある⁽⁶⁾。同志社高等学校の図書館を活用した授業の経験により、情報科教員の鈴木潤氏が学習態度から生徒を4タイプに分けている。図1は報告書に掲載されている図に、鈴木氏が文中で述べていることを筆者が少し加筆したものである。教科教員と司書教諭のどちらが授業を主導するかが分かりやすく図式化されており、学校図書館を探究学習に使用するには、教科教員と司書教諭両者の指導がケースバイケースが必要であることが明瞭に示されている。

4. 科目「学習指導と学校図書館」の今後

4. 1. 学校図書館の課題

今後、アクティブラーニング、インクルーシブ教育の導入で、学校図書館は今まで以上に収集・提供する資料形態を考慮する必要がある。学習に支援を必要とする児童・生

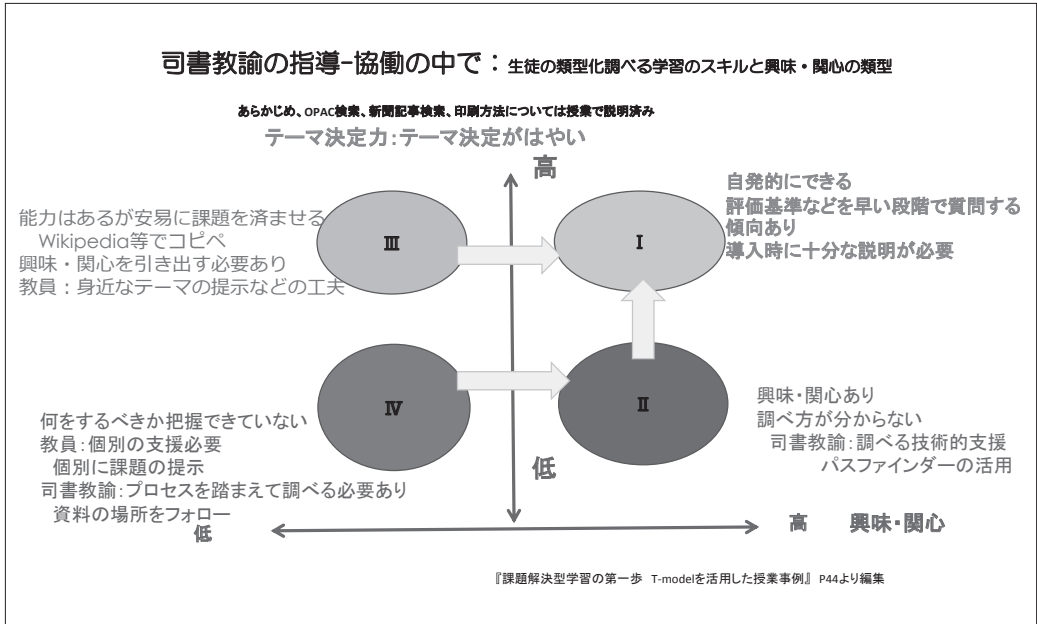


図 1

徒も、他の児童・生徒と同じように知識や情報を得られるように図書館の環境を整備しなければならない。また、ICT を活用する授業に併せて、情報の読解力も必要となる。近年の PISA の結果を見ても、読解力は向上していない。読書への興味・関心を引き出すだけでなく、これからの学習のあり方を考慮するなら、収集した情報の内容を理論的に的確に理解できる力の育成も考慮しなければならない。他館種と異なる学校図書館の役割は、肉体的・精神的にも発達途上の児童・生徒が、自立した学習者になるように育み、支援することである。そのために、レファレンスワークのあり方も異なる。児童・生徒が求める資料を即提供せず、自ら資料を探せるよう、資料・情報へのアクセス方法を助言する。このような「教育的」側面が学校図書館には多くある。

4. 2. 司書教諭と学校司書を養成する科目「学習指導と学校図書館」

同志社大学では、司書教諭資格科目で学校司書も養成することになった。学校図書館の見学で「司書教諭のやりがいは何ですか。」との学生の質問に、司書教諭は「教育に関わっていると感じられるとき。」と答えている。

これまでの授業を振り返ってみると、司書教諭を目指す学生は、教員として、児童・生徒に学習者中心の学びをおこなうために、学校図書館の活用を教授方法の一つと考えている。彼らは教育実習などを通じ、児童・生徒の学習行動をイメージする。図書館を活用するとき、教員の導きで学習者がどのように学びに到達するか、どのような学習効

果があるかを考える。教育的なものに基盤を置いている。

学校司書を目指す学生は、児童・生徒が、主体的に図書館を利用できるために、「分類の説明、資料の探索・検索の指導・助言と読書の勧め」などを主たる支援と考えている。加えて、「気軽に立ち寄れる図書館の雰囲気作り」のような図書館の環境整備を支援に含み、図書館に基盤を置いた支援を考えている。司書教諭は学校図書館経営に携わる場合もあり、図書館に基盤をおくことも不可欠である。学校図書館に司書教諭と学校司書が存在する現状では、双方が自らの専門領域を理解した上で、図書館を活用した学習活動への指導や支援のあり方を考えるのが順当かと思う。

「学習指導と学校図書館」で学生が、学校図書館の活用方法や学校図書館の役割を理解することは達成できたと思う。しかし、司書教諭を目指している学生が、自らを「学校司書」と呼ぶこともあり、司書教諭をどれほど認識できたか疑問が残る。学校図書館を活用した学習活動への指導や支援について、二つの専門領域の違いを理解させたいうえで、司書教諭と学校司書の協働的な支援方法を学生に考えさせるための方策を見つけ出すには至らなかった。

「春から学校に勤めます。図書館使いますよ。」と声をかけてくれる学生がいる。「ホント。嬉しい。」と答える。心から嬉しい。毎年、学生に課題を課すとき、「うまくいくな。」と心もとなく思いながら授業を始める。「なんでこんなことをと思ったけど、調べてみたら楽しかった。」「こんなふうに歴史を学べたら、きっと楽しく、内容を忘れなかったと思う。」などの感想も寄せられた。歴史専攻の学生グループは発表に現地まで行って撮影した写真を使った。このような事例は多々あった。特に6時限目の学生の中には、社会に出た後、再度教師を目指して大学に戻った者もいて、「授業で具体的にどのように図書館を使うのか、参考になった。」との声も寄せられた。このような声を聞けることが、嬉しかった。他方、「こんなに司書教諭には仕事があると思わなかった。兼任でできる仕事ではないので、司書教諭にならないと思う。」との声もあった。学生の作品の写真、学生のパスファインダーなどの優れた作品を掲載したかったが、紙面の都合で割愛する。

おわりに

同志社との関係は学生、社員時代を合わせるとほぼ半世紀にわたる。この中で、同志社大学学校図書館学研究会（同学研）の存在は大きかった。この研究会でおこなった『インフォメーション・パワー—学習のためのパートナーシップの構築—計画立案ガイド』⁽⁷⁾の翻訳、『Know It All』⁽⁸⁾の聞き取りと翻訳に参加した。これらの活動には、英語にご堪能な元梅花女子大学教授、漢那憲治先生のご教示が大きかった。「総合的な

学習の時間」の支援のお返しと、勤務校の外国人講師が聞き取りに協力し、訳しても分からない文面や固有名詞についても解説してくれた。評価に取り入れてきたループブックも『インフォメーション・パワー—学習のパートナーシップの構築—計画立案ガイド—』を参考にした。これ以前の『インフォメーション・パワー—学校図書館メディアプログラムのためのガイドライン』も同志社大学で翻訳されている。渡辺信一元同志社大学教授のもと、学校図書館の先駆けであるアメリカの学校図書館の時代ごとの基準や、状況を知ることができる環境が同志社大学にあった。

情報リテラシーという言葉が定着し始めた頃、いくつかの研究会や大学を中心に、それに関する文献の翻訳が発表されていた。同学研で翻訳に参加していた平井むつみ氏(元同志社香里中学・高等学校、元同志社中学校)と筆者、さらに戸田久美子氏(同志社国際中学校・高等学校)で、何かイベントができないか話し合い、親交のあった司書課程の人に協力を求めた。これを契機に「同志社大学ライブラリアンズフォーラム 2003」を2003年11月24日、今出川校地の明徳館で開催することになった。様々な館種に勤める卒業生が実行委員となり、休日に手弁当で集まり、それぞれが持つネットワークを通じての呼びかけで、関東から九州まで170余名の図書館関係者や卒業生が集まった。このフォーラムの翌年には、同志社大学司書課程50周年記念行事の一つとして「同志社ライブラリアンズフォーラム 2004」が2004年10月10日、11日に開催されることになった。一から大会を作り上げたのが懐かしい。

2000年代に入ると、司書教諭として勤めていた同志社女子中学校・高等学校と司書課程との関係が深くなった。当時、同志社大学の図書館実習生を受け入れていたいくつかの図書館は、指定管理制度の導入によって実習生を受け入れ指導する余裕がないようであった。そこで司書課程からの依頼で、2000年度から同志社大学の図書館実習生を受け入れ、今日に至っている。また、2001年度から年度末の蔵書点検作業を司書課程に依頼し、2006年度から、非常勤であるが司書の採用を司書課程に依頼してきた。

勤務校が大学に近かったので、新入社員の頃から、渡辺信一先生には国内外の図書館に関する様々な講演会によく誘って頂いた。中村百合子立教大学教授は、同志社大学に在職中、海外の学校図書館の研究者をよく招かれ、講演会を勤務校でおこなったこともあった。講演会を通じて様々な知見を得ることができた。さらに同志社大学で教える機会を頂き、共同研究への参加のお誘いを頂いたことにも感謝している。多くの卒業生が、図書館や図書館に関係する仕事についている同志社大学司書課程の複層的な人とのつながりの中で、学校図書館に関わられたこと幸いに思う。同志社大学で授業を担当したこの10余年間で、教室の設備機器が徐々に取り換えられてきた。VHS ビデオデッキからDVD・BRのディスクプレイヤーに代わり、通信ケーブルはピンタイプからHDMIに代わった。はじめは、私用のパソコンを持ち込んでいたが、教室に備えられたパソコン

で十分に授業がおこなえるようになった。コロナ禍によってさらに、情報機器の整備をはじめ授業は様々な形態に進展するだろうと想像しつつ、『同志社大学図書館学年報』に投稿の機会をくださった原田隆史先生、佐藤翔先生に感謝し、原稿を書き終える。

【注及び引用文献】

- (1) 中島幸子「日本における遠隔教育による司書教諭資格付与の現状と課題 大学通信教育課程とラーニング(メディア授業)を事例として」『St. Paul's Librarian』No.34 2019. 3. p.85-100.
- (2) 文部科学省「学習指導要領平成29年中学校社会歴史的分野」
https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf [引用日：2021-01-16]
- (3) 神奈川県教育委員会「思考力などを問う～高など学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ vol.20【社会】平成26年度問題」『中等教育資料』No.954 平成27年10月. p.82-83.
- (4) 広島県教育委員会「思考力などを問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ vol.31【社会】平成27年度問題」『中等教育資料』No.965 平成28年9月. p.78-79.
- (5) AMERICAN ASSOCIATION OF SCHOOL LIBRARIANS 『STANDARDS FOR 21st-CENTURY LEARNER IN ACTION』AASL 2009. p86.
SKILLS BENCHMARKS TO ACHIEVE BY GRADE 8 の情報活用のスキルの指標として、INDICATION1.1.5 Recognize that information has a social or cultural context Based on currency, accuracy, authority, and point of view の記述がある。
- (6) 鈴木潤「情報科学習指導案 同志社「確かな学力PT」『課題解決型学習の第一歩— T-model を活用した授業事例』同志社「確かな学力PT」2011. p.43-44.
文部科学省の「学校図書館の有効な活用方法に関する調査研究」の募集に同志社の学内校の研究・連絡会議である学校図書館研究会より立ち上げた同志社「確かな学力PT」が応募し採択されたので冊子にした。
- (7) アメリカ・スクールライブラリアン協会 Donald C. Adcock 編 同志社大学学校図書館学研究会訳『インフォメーション・パワー—学習のためのパートナーシップの構築—計画立案ガイド—』同学研 2003. 116p.
- (8) 同志社大学学校図書館学研究会『アメリカの学校図書館基準に学ぶ— IP および Know It All を中心に—』同学研 2009. 447p.

(いえき きよみ。同志社大学免許資格課程センター嘱託講師)